

[成果情報名]山菜「ツリガネニンジン」の実生を利用した増殖と栽培技術

[要約] 「ツリガネニンジン」の実生による栽培方法を確立した。実生繁殖により 1 株から約 2,000 株の成株が得られる。採種直後の 11 月に播種して翌春定植すると、定植翌年から収穫できる。定植は株間 10 ～ 15cm 程度の密植とし、窒素施肥量は基肥 1.0kg/a とする。

[担当] 総農セ・高冷地振興セ・野菜作物科・石川寛人

[分類] 技術・普及

[課題の要請元] 各直売所生産組合、中北・峡南農務事務所

[背景・ねらい]

山菜類は自然に恵まれた本県の特徴が活かせる特産物として、直売等で需要が伸びており、販売増加が期待されている。しかし、ほとんどの山菜類の増殖は株分けなどの栄養繁殖であるため増殖率が低いことや、苗の入手が困難であることが問題となっている。一方、山菜「ツリガネニンジン」は、北巨摩地域で「ミネバ」などと呼ばれ親しまれており、一部直売所で高単価で取引されているが、自生株の採取が主であり、大量増殖可能な実生繁殖方法や畑地での栽培技術は未確立である。

そこで、山菜類の産地化に向け、「ツリガネニンジン」の実生を利用した増殖と栽培方法を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 実生による増殖効率は株分け繁殖と比較して高く、2 年後には 1 株から約 2,000 株の成株が得られる。(表 1)。
2. 採種は、9 月下旬～ 10 月中旬に種子の付いた花茎ごと切除、乾燥し、種子を落として行う (図 1)。採種量は、風選後で 1 株当たり 15,000 粒程度である (データ略)。
3. 発芽には光を必要とする。発芽率は 80 % 程度である (データ略)。
4. 播種期は採種直後の 11 月、定植期は 6 月とし、株間 10 ～ 15cm 程度の密植で、窒素施肥量は基肥 1.0kg/a とする (表 2、図 2)。

[成果の活用上の留意点]

1. 「ツリガネニンジン」は春に萌芽する 10 ～ 15cm 程度の若芽を収穫し利用する。
2. 播種、育苗は本葉展開まで無加温ハウス内の温床ビニールトンネル内で行う。本葉展開後は、凍害を受けない程度の温度で管理する。
3. 実生繁殖による株のばらつきは、直売向けとしては問題とならない。
4. 「ツリガネニンジン」の増殖用の原種苗は種苗店などで入手可能である。

[期待される効果]

1. 農産物直売所などで販売品目が充実し、地元農産物の消費や売上が伸び、農家経営の一助となる。
2. 「ツリガネニンジン」の苗の増殖が容易になることで、導入拡大が図られる。

[具体的データ]



写真1 収穫期の様子



写真2 荷姿



写真3 種子

表1 増殖効率の比較

繁殖方法	親株1株からの 得苗数	1a分の苗に 必要な親株数
実生繁殖	2,143株	1株
株分け繁殖	2株	715株

※採種量15,000粒、播種量7粒/セル、栽植密度1,429株/aとして算出

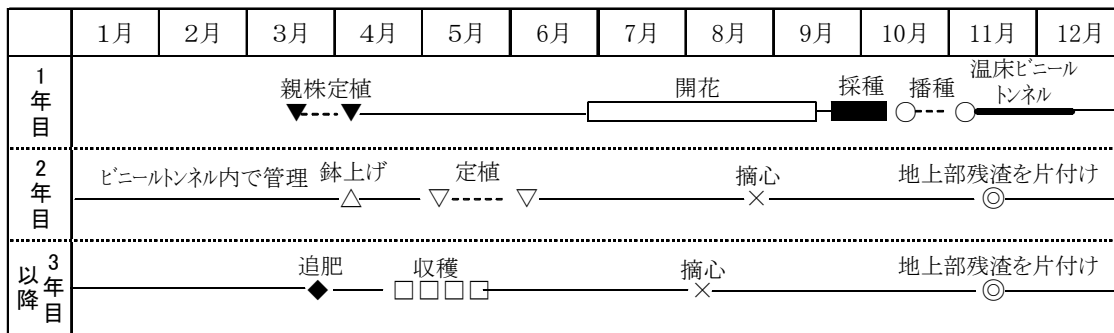


図1 ツリガネニンジンの実生繁殖を利用した栽培

表2 播種、定植日と収量(2009・2010年)

播種日	定植日	収量 (kg/a)
11/4	6/12	9.5
2/16	7/24	7.5
4/22	9/9	6.6

※耕種概要: 畝間150cm、株間20cm、2条植え(667株/a)
 施肥量: 窒素1.0kg/a、リン酸1.0kg/a、加里1.0kg/a
 黒マルチ栽培
 ※本葉展開後、最低温度2℃のハウスで管理

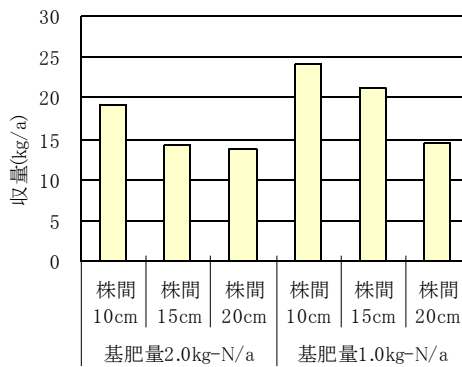


図2 窒素施肥量と株間がツリガネニンジンの収量に及ぼす影響(2011年)

※耕種概要: 播種11/11、畝間140cm
 本葉展開後無加温ハウス内トンネルで管理、他は表2と同様

[その他]

研究課題名: 新規山菜類の選定と栽培技術の確立

予算区分: 県単

研究期間: 2008 ~ 2011 年度

研究担当者: 石川寛人、窪田哲、對木啓介